



第十一話 赤毛馬の騎士

森でイノブタたちがいじめられているということを聞いたのはもうカナカナの物寂しい鳴き声がとうとう聞かれなくなった頃です。風は時に冷たく、半袖で出かけると帰りには鳥肌がたつことがよくあります。

将棋倶楽部で会ったとき、きつねのおっさんの話によると、イノシシたちは初めはヴルの子供だといっているのでぼくが連れていったイノブタたちをちやほやし、自分たちの子供らと同等に扱って何不自由なく過ごせるようにしていたが、ヴルがどうやら人間の手に掛かって殺されたか、捕獲されたらしいと知ると、イノブタたちを差別し始めた。具体的には、食物を子供たちに分け与えるとき、最後の順番がイノブタだった。そして何匹かは食べ物にありつけなくなることが普通だった。

イノシシの長（おさ）はヴルの兄だが、自分の子供たちをヴルの子供たちやなかんずくイノブタたちから遠ざけ、優遇した。そしてイノブタらは腹違いのイノシシ兄弟たちからも差別を受け始めた。差別される者が差別された腹いせに自分より弱いとみなす者たちを差別するのはよくあることだ。

そして、このイノブタたちを救い出すために父ヴルが危険を冒し、その結果森に帰ってこなくなったことも彼らをしてイノブタらをよけいに迫害せしめた。

ヴルはイノブタたちにとっても父親である。初めて来た慣れない森で唯一の頼りとなるはずだった父を失った悲しみの上に、いじめがのしかかってきた。

イノシシの子たちはイノブタたちにじゃれついているように見せて、いじめて、けがもさせているのだった。10頭いたイノブタたちはどういう訳か7頭に減って、残ったイノブタたちも森に来たときよりかなりやせ細っているという。豚小屋で飼育されていたイノブタたちは自然の中では食物を自分で得るすべを知らない。放っておけばイノブタたちは冬にはみな餓死するだろうときつねのおっさんは言っていた。

ある朝、ぼくは、イノブタたちを飢えから救うために、食料をずっしり詰めたザックを背負って森に入った。荷物が重いので、歩きにくい湖畔を回るのでなくボートに乗って対岸に行った。そこでいくつかの荷物をボートに残して少しでも身軽になって進んだ。

そして、イノシシの集落に近づいたときに、馬の荒い鼻息の音を聞いた。見ると全体が赤毛の立派な馬がこちらのほうにやってくる。それに乗っているのはこの世のものとは思えない異様な顔をした人でした。片手に剣を持っています。目が合うとぼくは身震いし、怖くて、しゃがみこみ、地面に伏して、そちらを見ないようにしました。

その人は馬をぼくのそばで立ち止まらせ、「恐れることはない、顔を上げなさい」と言った。

「あなたはどなたですか？」とおそるおそる顔を上げながらぼくは震える声で言った。若いのか年寄りなのかもわからないし、男か女かもわからないし、日本人か外国人かもわからない顔つきです。声にしても、同じです。

その人は言った、「私は、地より平和を奪い、生きとし生けるものに殺し合いをさせる者だ。万物を争わせ、それを秩序とするのが私の責務だ」

「あなたがこの森に来られて、いじめが起きています。両親のいない弱いイノブタたちが犠牲になっています。」ぼくは勇気を奮って言った。

「私が通り過ぎるところには争いが起きる。生きとし生けるものは弱者（じゃくしゃ）をねらい、弱者はさらに弱い者をねらう。そしてそれらの弱者は寄り集まりひるがえって強者（きょうしゃ）をねらう。それが秩序だ」

「そのような秩序は悪です。倫理や道徳に反します」ぼくは反論した。

「おまえたちのいう倫理や道徳というものを越えて、秩序がある。」

「あなたは悪魔ですか？」

「悪魔は秩序を乱す。私は秩序を守るのだ」

「ではあなたは秩序のために争いを起こさせるのですか？」

「秩序のために争いを起こさせる。私のあとから来る者は、死をもたらすであろう。」

ぼくは返す言葉もなく、去っていく馬上のこの人の後ろ姿を見送った。そこに神々しさを見た。

生物は確かに秩序というものの上に存在している。そしてその秩序は絶え間ない弱肉強食による自然淘汰の循環を骨格にして守られている。この循環を止めようとする道徳とか倫理というものは焼け石に水のように非力なものだ。法律もそうだ。秩序の必然の要素として争いや迫害、いじめがあるのなら、これを受け入れねばならない。

いじめの根源について、ぼくには持論がある。ある種族のペンギンの母親は、卵を二個産む。そして雛がかえり、これらを比べ、より元気のいいほうにえさを与える。そして、他方は放置するか、ひどいときには害を与え、早死にさせる。ここに幼児虐待の起源を見た気がした。こうして比較的強者が生き残るので、種全体にとっても生存力が向上し種保存が保証される。

そうすると、この弱いほうの雛が、この逆境にも関わらず生き延びる方法はおそらく一つしかない。それは自分が死ぬ前に、強い兄弟に怪我をさせて自分より弱者におとしめ自分が比較的強者の立場にのし上がる、あるいは死亡させて、母親から自分以外の選択肢を奪うことだ。ここにいじめの根源を見る。

人間の場合、弱者は一对一ではかなわないから、弱者が集団を作り、ターゲットの強者を一人だけに絞り込んで、アタックをかける。もしこれが弱者らの生存競争におけるおそらく一つしかない生存のため

の手段であるなら、それは、善悪などという人工的思想を越えて自然が与える正統なテクニックとしてとらえられるべきであろう。

そのようなことを考えながら、その人と赤毛の馬の姿が視界から去っていくのを見届けた。次に来るのが死をもたらす者なら急いでイノブタたちを助けねばならないと思った。しかしそれは秩序を乱すことになるのだろう。かの人はそれは悪魔のやることだと言った。

イノブタを連れてきたことがこの森の生態系という秩序を乱すだろうことはわかっていた。イノブタのメスたちはやがてイノシシとの子を産み、より生命力のあるイノブタが増え、やがて純血のイノシシはこの森から駆逐されるかもしれないと思った。そしておそらくそのような秩序の乱れを防ぐべく、この森はあの赤毛馬の騎士を呼んだのだ。早いうちにイノブタたちを駆除しようとしているのだ、イノブタが増えて手に負えなくなる前に・・・

しかしぼくはとりあえず持ってきた食べ物は飢えたイノブタにあげようと思った。

「しかし」とまたぼくは思った。かのひとが言ったことは矛盾しているわけではない。これからまたイノブタ料理を食べることがないとも限らないぼくが倫理だの道徳だのという資格もない。その時々センチメンタルなかつ瞬間的な独善的偽善行為により自分は動物愛護家だと悦んでいるのは情けない。そしてその近視眼的一時的行為が秩序を乱す悪魔のやることだということに反論はできない。

何よりも、ぼくは、あとに来る死をもたらすという者に会うのが怖くなり、イノブタ用の食べ物を詰め込んだザックをそこに残して、森を出ようと急ぎ足で赤毛馬の騎士の行った方向に進んだ。そしてそのときだ、すでに聞き慣れたイノブタの泣き声が聞こえてきた。イノシシの子らに追われてキーキー泣きながら一頭のイノブタがぼくのほうに走ってきていた。それはやせ細り、顔から血を流し、後ろ足の一本はびっこをひいていた。

そのときぼくの体内に起こった突発的な怒りは抑えることのできないものだった。ぼくは引き返し、ザックを拾い、それを振った、投げつけた。

終わったときには、牙（きば）の生え始めたイノシシの子たちの死体がいくつか目の前に転がっていた。イノブタは地に横たわって、はあはあ息をしていた。

「ヴル、おまえが何の心配もなく暮らしている、と言っていたおまえの子らをおれは殺してしまったようだ。秩序を乱してしまったな。確かに悪魔のしわざか・・・」

すると森の奥の方の木漏れ日に照らされて一頭の馬が現れた。それは青ざめていた。誰かがそれに乗っている。その人は深い灰色の頭巾をかぶり細い鼻だけが見えた。そしてたづなを引いて馬を止め、ぼくに手招きをした。ぼくは逃げた。振り返ることなく急ぎ足で逃げた。後ろから馬の落葉を踏む足音が聞こえてくる。ツタが手足にからまり、地に落ちた枯れ木が足を打った。わき目もふらずきつねの集落を突っ切ると、赤毛馬の騎士の神々しい後姿が見えてきた。ぼくは彼の顔を見まいと無言で走って追い越し、そのまま秘密の湖に飛び込み泳いで横切り、しずくを落としながら、森の出口を目指した。青い竹藪をかがんでくぐり、やっと森から逃げ出すと、スケッチブックをボートに忘れてきたことに気づいた。

完

第一話に戻る:

<http://p.booklog.jp/book/72372/read>

or

<http://p.booklog.jp/book/55756/read>